

在外教育施設で実現するコロナ禍での学校生活

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校）教諭
大阪教育大学附属天王寺小学校教諭 渡邊 康世

キーワード：在外教育施設、バンコク、配信授業、教科教育、新しい生活様式の中での学習活動

泰日協会学校（バンコク日本人学校）

THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL

<http://www.tjas.ac.th>

1. はじめに

私は、小学3年生から5年生までの時期をカイロ日本人学校で過ごした。そこでは、日本から遠く離れた場所であるが、仲間と共に日本と変わらぬ教育を受けたり、エジプトの文化を学んだり日本の文化を融合させた学習をしたりし、大変貴重な経験をする事ができた。その時の経験から、いつか自分も教員を目指し、教員としての経験を十分積んでから、海外で暮らす日本や日本にルーツを持つ子どもたちと共に学びたいと願っていた。そして念願叶って平成30年度から令和2年度までの3年間、バンコク日本人学校で教鞭を執ることとなった。

バンコク日本人学校は、世界で初めて創設された日本人学校であり、世界最大の日本人学校である。私が担当していた小学1年部は、令和2年度は16クラスあった。児童数350名、教員数20名という、子どもも大人も世界最大の数である。

派遣教員最終年である3年目は、学年主任という責任のある立場で不安もたくさんあった。そこに追い打ちをかけるように、新型コロナウイルス感染症による影響で、バンコク日本人学校が開校できなくなるかもしれないという前代未聞の事態となった。そんな不安の中でスタートさせた昨年度について報告する。

2. 令和2年度のバンコク日本人学校

2020年3月18日以降、全ての教育機関が休校になったことを受け、バンコク日本人学校でも5月よりインターネットを活用した配信授業（オンデマンド授業）を開始することになった。

4月初めに派遣される予定だった教員も渡航することができなかった。そのため、年度始めの学年の諸準備を例年の半分の人数で行わなければならず、職員は膨大な事務作業に追われていた。

4月中に予定されていた入学式や始業式は中止となり、授業配信が開始される日に行なった。本来ならば、学校で手渡しするはずであった教科書やドリル類、学年で使用する文房具セットなどは、保護者が車で学校に来校し、ドライブスルー形式で手渡しすることとなった。

7月からは、全校児童を3つのグループに分け、分散登校と配信授業を並行して行なった。前述の通り、派遣予定であった教員が来ていないということもあり、教員の数が不足していた。そのため、残っている教員で16クラスある学級を分担し、臨時担任という形で自分が受け持つ本来の学級と兼任して担当した。

9月からは、「バンコク日本人学校の新しい生活様式」に基づき、全員通常登校できた。昨年度派遣の教

員も揃い、子どもも保護者も教員も安堵していた。

1月からは、バンコクやバンコクの近隣の都において、新型コロナウイルス感染者が増加したため、再び配信授業が再開となった。2月より、さらに改定を加えた「新しい生活様式」のもと、通常登校が再開された。昨年度は、配信と登校が繰り返され、児童にとっても保護者にとっても教員にとっても心理的に負担が大きい1年となった。

3. 1年生における配信授業について

1年生の子どもたちは、多くの友達との関わり合いの中で社会性を身に付け、個の存在を認めあう経験を重ねて成長していく時期である。しかし昨年度のように、年度始めの大切な時期を家庭の中で過ごすということで、配信授業の中で他者との関りの場をいかにして設定するかについて考えなければならなかった。海外で生活していることや、不必要な接触を極力避けなければならないという悪条件の中、子どもが他者から認めってもらったり、他者の考えに触れたりする経験を積ませるかということが、1年部として考えなければならぬ大きな課題であった。また、1年生になる子どもたちは、在タイ年数や幼稚園での経験も様々で、これまでの経験が多様で大きく異なる。文字が読める子とそうでない子、日本語の理解力も様々で、課題を配信するにあたって、準備が1人でできない、課題を1人では成し遂げられないなどの困難が予想された。さまざまな学習が自分の力ではできず、保護者の手を借りないと成り立たないということも予想された。本来、学校で教員が行うべき児童への指導や支援を、一時的に保護者にしてもらわなければならない事態となった。だから、子どもへの指導だけでなく、保護者にも指導の仕方や採点基準を丁寧に説明する必要があった。特に、初めて小学校生活を送る保護者に関しては、良い意味でもかなり神経質であるので、保護者への十分な支援も必要であった。

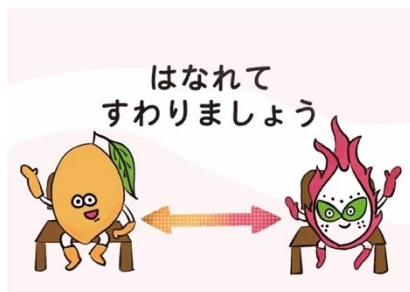
上記のような1年生としての課題をふまえ、1年部教員で協議を進めた結果、【安心して楽しく学習できる内容にする】【読むより見てわかる動画にする】ということを基盤とし、各教科配信授業動画を作成することとした。これより、1学期間と3学期の1か月間取り組んで作成した配信授業での動画や教材の一部を紹介する。

(1) 1学期 一朝の会の動画の充実

学習規律を定着させるために、朝の会の時間を有効的に利用した。

初めての学校生活を自宅でスタートしなければならず、残念な思いをしている児童や保護者もたくさんいる中、配信を通してではあるが、子どもたちが学校や教員の顔を見て安心できるような動画や、初めての小学校生活に期待がもてるものとなるような動画を作成するように計画した。実際には、学校の様子をイメージできるよう、学校内や教室を撮影したもの、図書館や体育館などの施設の使い方を動画で撮影したり、次回登校した際にスムーズに学習に参加できたりするような、工夫を重ねた動画を作成した。以下は《朝の会》の動画の一例である。

教員の自己紹介	挨拶の仕方	返事の仕方	声の大きさについて
話の聞き方	椅子の座り方	廊下の歩き方	授業準備の仕方
学習する時の態度	バスの乗り方	休み時間の過ごし方	体操服の着替え方



イラストでも新しい生活様式を呼び掛ける

動画を作成する際に特に配慮したのは、一方的に指導するだけの内容のものでなく、どちらが正しい行動なのかを児童が考えたり、答えを選択したり問いかけたりするような内容の動画にした事であった。例えば、「椅子の座り方」の動画であれば、教員が動画に参加し、良い手本とそうでない手本を演じ、どちらが正しい座り方であるかを考えるといった内容である。これを配信した結果、分散登校時の児童の様子は、自分で正しい座り方で座るように意識したり、合言葉を覚えて呼び掛け合ったりする姿があった。

挨拶に関しても、誰に挨拶をするのか、正しい挨拶とはどういう挨拶のことであるのか、ということ配信したので、友達や教員に対してとても丁寧に接することができる児童が多いように感じた。家庭でも保護者や兄妹と話合っただけで考えたり、挨拶を練習したりした様子が伺えたので、大変効果的な動画の作成ができたと考える。また、教員の自己紹介動画や教員による読み聞かせ動画を配信したことで、児童に安心感を与え、心が休まるような《朝の会》となった。

(2) 在宅学習と分散登校と並行しての学習

タイ教育省私学監督局の許可が下りたので、7月より分散登校を開始させることとなった。全学年学級全ての児童が一度に登校することは現実的に不可能であったため、学年を3つのグループに分けて登校させた。登校日でない日は、引き続き配信での学習を進めていくことになった。分散登校開始に向けてGoogle Meetを利用し、オンラインでの学級開きを行った。この会は、子どもたちにとっても教員にとっても保護者にとっても大変貴重な機会となった。学級の子どもたち同士の顔合わせ、担任との顔合わせが実現できた。また、次回登校時への期待も高まり、有意義な時間を過ごすことができた。

分散登校開始から夏期休業までの約1ヶ月は、成績処理のためのテストの実施が中心であったが、1年生は学校に登校すること自体が初めてであるので、学校でしかできないことを体験したり、学校は友達と学習ができる楽しい場所であるということを感じたりして欲しかった。だから、テストや知識を詰め込むだけの授業をするのではなく、生活科や図画工作科の学習、体育や音楽などの活動が中心となる教科をできるだけ多く時間割に組み込むこととした。

1年生を迎える会や、授業参観、校外学習といったあらゆる行事が中止になる中、1年生にも友達との思い出を少しでも作ってもらえたらと、七夕の飾りつけを行った。子どもたちの願いの中にも、「早く毎日学校に行けますように」や「コロナウイルスが無くなって平和な世界になりますように」といった願いが書かれており、この世界的な状況が子どもたちの心にも大きく影響を与えているのだと改めて感じた。

分散登校開始後に回収した各家庭で取り組んだ家庭学習の提出物を確認していたところ、見えてきた課題がある。それは、「学習の二極化」である。保護者が手厚くサポートをしている家庭、全くサポートしていない家庭で大きく差が広がったと感じた。インターネットを使うことにより、「もっと深く学びたい」「調べてみよう」と視野を広げて学習を進めた子、言われた課題のみに取り組んだ子、自分が興味をもったことだけに取り組んだ子と、学習意欲や理解度に大きく差が広がっていたことが現状としてあった。よって、分散登校時には、新たに学習内容を指導するより、家庭で学習したことを復習する時間も十分に取るようにした。特に平仮名の書き順、算数科では「どちらがながい」といった単元で学習の理解度に顕著に差が出ていた。教員も、時数分きちんと配信で学習をしたから知識理解が深まっていると思いついていたが、不十分どころがたくさんあったので、もう一度初めから指導をするつもりで授業づくりに取り組んだ。

(3) 3学期 一学習スタイルの維持と1学期の反省を活かした動画作成

新型コロナウイルス感染者が、バンコク近隣で多数出たため、1月は再び配信での授業を行うこととなった。

1学期での配信授業で得た成果と反省と保護者に実施したアンケート結果を基に、【子どもが1人でもできるような内容にする(手本のPDFを課題に貼り付けたり、説明をさらに丁寧にしたりする)】【教員の顔を見て、安心して楽しく学習できるようにする】という2点を特に重視して作成することとした。

2学期に積み上げてきた各学級での学習スタイルをなるべく崩さないような配信授業を作成しなければならな



中庭での七夕の飾り付けの様子

かった。ノートの取り方、指示の出し方、板書の書き方などが学級によって異なるため、十分注意して動画を作成しなければならなかった。そこで、教科ごとに動画を作成する担当を決め、各学級での実態と照らし合わせ、子どもが学習する際に混乱しないような動画を作成することにした。また、短い配信授業期間の中で、たくさんの学習内容を詰め込むような配信授業にするのではなく、1つの内容を丁寧に時間をかけて取り組んで学習するような授業を作成するよう心掛けた。

配信授業が再開されるということで、子どもたちの学びに対する意欲の低下や集中力が保てないといったことが懸念されたので、1年部では、1学期と同様、「朝の会」の時間を充実させ、季節の話題や教員による読み聞かせ、生活目標についての話などを配信し、子どもたちが1日のスタートを明るく楽しい気分で切ることができるように留意し、作成を進めた。

4. 終わりに

バンコク日本人学校で実践したオンデマンド方式での配信授業には、メリット（繰り返し視聴できるので、何度でも復習することができる）やデメリット（子どもたちが学習した過程を見取りにくい）があることがわかった。

本来ならば、学校で行われるべき入学式や始業式が配信で執り行われたり、毎年子どもたちも楽しみにしている校外学習や現地校との交流会といった行事も中止になったりし、昨年度は前代未聞の1年であった。マイナスな面ばかりを取り上げていたらきりはないかも知れないが、配信授業を行うことで得たこともある。それは、教員一人ひとりに動画作成スキルが身に付いたこと、短時間の配信時間の中で、指導すべきことをまとめ、わかりやすい授業を組み立てていく力が身についたことである。また、子どもたちと関わる時間が短かったからこそ、より深く一人ひとりを見つめ、児童理解に努めることができたし、共に学習する楽しさや奥深さを存分に味わうことができた。

現在、日本の学校もICT環境が整備されつつあり、GIGAスクール構想を強力に推進している。昨年度のこのバンコク日本人学校での経験は、今後日本の子どもたちにも何らかの形で還元できるに違いないと考えている。